

# 真田宝物館蔵書『鹿児島言葉わらひの種』共通語訳文の性格

## A Report of the Standard Colloquial in “Kagoshimakotoba-Warainotane” Owned by Sanada Treasure Museum

山 本 淳

Jun Yamamoto

要旨：明治30年代に筆写された方言会話集『鹿児島言葉わらひの種』（真田宝物館所蔵）に用いられている共通語訳文について、対立する言語事象を中心に検討した。実態としては、東日本の表現が主として用いられながら、西日本方言に通用する言語事象も出現する。また文語的な古体の表現が口頭の表現に交って使われることもあり、この二つの傾向は、明治期の東京語が新たに共通語として全国に広く通用するようになるまでの過渡的様相として捉えられ、鹿児島方言を共通語に翻す便宜として現れた特徴でもあると考えられることを述べた。  
キーワード：明治期東京語、鹿児島方言、共通語訳、東西対立、新旧混交、

### 1. はじめに

小稿は、長野市松代にある真田宝物館が所有する明治32年の写本『鹿児島言葉わらひの種』（典籍19-1-78）の言語資料性について検討するものである。日常生活の一端を主として会話体で綴った方言資料であり、鹿児島方言をカナ書きし、その直下もしくは傍ら（左右）に、漢字かな交りによって相当する意味を記している。このうちカナ書きされた鹿児島方言を対象にして、音韻表記の確からしさを山本はすでに検討した（2008）。一方漢字かな交りによって記された語句あるいは文は、当時の共通語訳に相当するものと考えられるが、前稿においては表現上の揺れがあるということのみ触れ、具体的な内容には踏み込まなかった。今回は、この点に絞って検討する。

### 2. 資料および問題の所在

前稿と重複するが、資料の書誌的事項を以下記述する。

写本 1冊（島津輯子筆）

表紙 無地紫紙（縦24,0cm×横16,2cm）

右上隅 宝物館整理番号19-1-78と記したラベルあり

中央部 「鹿児島言葉／わらひの種」の二行書き（題簽なし）

左下隅 「桐印」の御印あり

見返し 無記載

裏表紙 表に同じく無地紫紙（無記載）

見返し 無記載

内題・尾題・柱心題 いずれもなし

本文 各丁12行（青色罫紙使用）

カナ書き（鹿児島方言の記述部分）・漢字かな交り（共通語訳文）・漢字カナ交り（解説文）

諸処朱筆による円括弧・傍点・傍線および加除訂正あり

丁数 全34丁（墨付き1丁から31丁表までの31丁分）

31丁裏の半丁分 破り取りあり

識語 「明治三十二年／五月初旬より末迄ニ而書おわる／三年町邸ニ而／しま津輯子」

原著者 不明

原本・その他の副本 不明

資料の書写者は鹿児島にゆかりある島津輯子であるが、原著者ではない。原著者もおそらく鹿児島に関係する人物と考えられるが定かではない。このあたりの事情については、前稿に詳しく記したので、それに譲って本稿では繰り返さない。

今回対象とするのは、本文漢字カナ交りで表記される共通語訳部分である。カナ書きされた鹿児島方言に相對する共通語訳が左傍あるいは右傍に記されている。今資料内に記された同一人物の会話に注目して、その共通語訳文を見てみる。

- 01 何処でも出ると泣てやかましようてたまりません 昨日なども御婚礼につれて参りましたら 泣やらどなるやらでやかましくてねへ あなた【ドケデンイクトナキヤイセカラシユシタマハン キニユナンドモゴジユンケエツレチメンシタヤ ナクヤラヲラクヤラセカラシユーシ ヲマアンサー】(12ウ⑥～⑩、客→主婦)

下線を施した部分について、同一場面、同一人物、同時発話の会話文中に、同一形容詞連用形がウ音便形と非音便形とで併記されている。対応する鹿児島方言も同形「セカラシユ(一)」である。東西対立の言語事象に関与する音韻現象と思われる。冒頭では対立する二項を表現上の揺れと表現したが、統一的ではない事情をめぐって用例を検討し、資料の共通語訳から浮かんでくる当世の方言会話集における共通語訳文の性格について考察する。

### 3. 共通語訳の二項対立表現

資料内部から、以下に示す事象が散見される。

- アワ行五段動詞連用形 促音便・ウ音便形
- 形容詞連用形 非音便・ウ音便形
- 断定辞 ダ・ジャ
- 否定辞 ナイ・ン
- 一段動詞命令形語尾 ロ・零
- 過去推量辞 タダロウ・タロウ

順次用例を検討する。列挙に際して、共通語訳、【 】には対応する鹿児島方言<sup>(1)</sup>、( )に所在および話し手・聞き手を示す。ただし、聞き手が特定できない場合は話し手のみを示す。また、話し手そのものが示されていない場合もあり、そこには ? を付しておく。

#### 3. 1 対立する音便形

##### 3. 1. 1 アワ行五段動詞連用形

- 02 生糸と真わたをかつてきて【シラガトネバシトコチキチ】(15ウ②、主婦→下女)  
 03 かつてあげよう【カツチャグ】(17ウ②、主婦→下女)  
 04 かつてゆくのであつたのに【カッテイカンニヤナランヂヤツタ】(17ウ⑪、主婦)  
 05 今夜かつて下さいよ【コンニヤコツタモンシナ】(18ウ⑩、男子→主婦《母》)  
 06 すきなをかつておいてよ【スイタトヲケヤイオ】(18ウ⑪、主婦《母》→男子)  
 07 かへりニかつてこよう【モドイガケコチク】(18ウ③、男子→主婦《母》)  
 08 よくあらつておいで【ユアルチケ】(28オ⑧、主人→下女)

- 09 買つて行とおもつてね【コチイコトモツチナ】(18ウ②、主婦→手代)  
 10 そふしたら晩に死でしまつた【ソシヤバンニホタイケシンシヤツタ】(19オ⑪、男子→母)  
 11 みんなしてたまからか、らふき出してしまつたから【ミンナマタワレデタツケネエ】(21ウ④、客→主人)  
 12 私のあたまからぶつかけてしまつてねへ【ヨイガビンタカライツカケツチナア】(21ウ⑤、客→主人)  
 13 みんなでにけでしまつたもんたがら【ミンナケニゲタ】(21ウ⑦、客→主人)  
 14 めた／＼にまげてしまつたの【ギリギリフンマゲチネヘ】(21ウ⑩、客→主人)  
 15 うしろの川へほうりこんでしまつた【ウシトンカワヘホタイコンダツケイナ】(21ウ⑪、客→主人)

動詞の種類で見れば、促音便形で現れるのは「買う」「洗う」「思う」「(～て) しまう」の四語である。次にウ音便形で現れる動詞を掲げる。「言う」「(～て) しまう」の二語である。

- 16 うるさくいふてミなうそでした【セワラシコツユタガウソソラ】(10ウ⑪、男性→友人)  
 17 庭鳥汁をこしらへろといふておゝき【ニワトイゾセヲセチュエ】(16ウ⑦、主婦→下女)  
 18 死ぬいふても泣もんでハないよ【ケシタチナクモンヂヤネテ】(27ウ①、父→男子)  
 19 てんごしやといふてすまして平気なのよ【テンゴイシタチイセエシレイシチヨツタ】(28オ②、男性)  
 20 せわしないことをいうておよこしなさる【ミツクセコツイヤレバ】(28ウ③、男性)  
 21 誰かそふゆふたか【ダガソゲユタカ】(28ウ⑩、男性)  
 22 すつかりこまつてしもた【スツタイキツカツタ】(15ウ⑥、主人→主婦・下女)  
 23 くさつてしもた【ケツサツタ】(26ウ⑧、?)

用例自体は少ないが、非音便形をとる動詞とウ音便形をとるものと別々に存立し、両形にまたがる動詞は「(～て) しまう」のみである。例22・23はウ音便形無表記である<sup>(2)</sup>。会話主別に見れば、「(～て) しまう」においては、促音便形をとる人物は客に限って連続的に用いられ、ウ音便形をとる人物はこれとは別人である。また用例ごとで見れば、例02・03・04・06・09と例17の主婦において、促音便形の例の方が多いながらウ音便形の例もある。

例21は、他例での「言う」の表記が異なっており、鹿児島方言「ユタ」に応じるごとく「ゆふた」とある。原著もしくは書写、いずれの段階においてかは判りかねるが、実際の発音に即した表記であることに注意しておきたい。

### 3. 1. 2 形容詞連用形

次に形容詞連用形の音便形の有無について用例を検討する。まずは非音便形から見る。

- 16 うるさくいふて【セワラシコツユタガ】(10ウ⑪、男性→友人) 既出  
 24 話し斗おもしろくて【ハナシガヲモシテモンゴアンデ】(14オ⑫、主人→客)  
 25 早くもつてきてあげてくたさいよ【ハヨモチキチヲアゲヤツタモンシ】(16オ⑨、下女→下男)  
 26 早くたらいの水におつけよ【タラインミヅイツケ／＼】(16オ⑫、主婦→下男)  
 27 早くふかないか【ヌグワンカ】(28オ⑫、男性→男子)  
 28 おかしくてたま(ママ)らんから【オカシユシタマラジ】(21ウ①、客→主人)  
 08 よくあらつておいで【ユアルチケ】(28オ⑧、主人→下女) 既出  
 29 ひどくこらさなければならん【セツペコナサンニヤナラン】(28ウ⑨、男性)

「早い」3例のほか、「うるさい」「おもしろい」「おかしい」「よい」「ひどい」など各例非

音便形である。このほかにも冒頭例01「やかましく」が数えられるが、さらに促音の添加した例30などは、より口頭語的である。

30 ちれつたくつてたまらないちやないか【相当部ナシ】(8ウ⑨、?)

たとえば『口語法別記』(大正6年刊)では、テに続く際に形容詞連用形に促音が伴うことに関して、「これを、「長くって」「嬉しくって」とも云うが、用いぬがよからう」として、『雑兵物語』からの引例を示している(165頁)。

また、敬語に続くものを対象からは外したが、次の1例は倒置形として非音便で表現されたものと理解して、とくにここに挙げておきたい。

31 とふそ御頼申しますよろしく【ドーカラタノンミヤゲモス】(25オ③、客→主婦)

ウ音便形をとるものについては、冒頭の例01の「やかましうて」のみである。むろんここには、「ござります」に続くようなウ音便形は対象として扱っていないが、「やかましい」1語が両形をとっており、主婦の客ひとりが両形を使用するという形となっている。

### 3. 1. 3 音便形の対立から

アワ行五段動詞および形容詞の音便形については、

- アワ行五段動詞の例では通常促音便形を主としながら一部の語に関しては例外なくウ音便形である
- 形容詞の例では基本的には非音便形でありごく僅かにウ音便形がある
- 使用者で見た場合動詞・形容詞いずれの場合においても同一人物に僅かながら両形が用いられる会話主が存する

とまとめられる。基本的に促音便形(動詞)・非音便形(形容詞)で共通語訳がなしているが、「言う」は必ずウ音便形であり、局部的にはウ音便形が勝る。この偏向は使用者においてではなく、語によって見られるものである。ウ音便形は江戸・東京語に存しないかと言えばそうではない<sup>(3)</sup>。次節のジャや否定辞ンについても言えることながら、近世後期以来、とくに上層部において根強くあったことは周知のとおりであり(小田切良知1943、小松寿雄1985等)、東京語の生成・展開にともなって、上方語的傾向を排していったのである。そうすると、東京語が成立し、定着するまでの揺れとして、西日本的な表現が現れた可能性がある。

## 3. 2 断定辞

### 3. 2. 1 ダとジャ

先に断定辞ジャの例から挙げておく。全7例である。

32 あれハ名代のちいさい人ぢやが【アラナデナモンヂヤライ】(9ウ⑨、?)

33 魚うりハあてにならん人ぢや【イラウヤタヂモネガクヂヤ】(27オ④、婦人→婦人)

34 これハふとつた人しや【コラコエタモンジヤ】(25オ⑧、女子→友人)

35 にくいやつじや【ニキヤツヂヤネ】(22オ⑪、主人→客)

36 却てそんがいくものじやつて【カヘチソンガアンモンヂヤツテ】(20オ④、男子→主婦)

37 おとならしい口上をいふものじや【クセラシコツイフモンジヤ】(26ウ⑪、男子→男子)

19 てんごしやといふてすまして平気なのよ【テンゴイシタチイセエシレイシチヨツタ】(28オ②、男性) 既出

このうち例36はの「じやつて」は、ジャトテの転訛形であり、他者の会話の引用例であることが判る。本文の鹿児島方言「ヂヤツテ」をそのまま援用したと思われる。うへの例すべては鹿児島方言「ヂヤ」をジャで翻しとっていることが確認される。

これに対して、ダはこれより遙かに多く、形容動詞(3例)および助動詞「ようだ」(2

例)「そうだ」(4例)を含めて、全部で46例を数える。うえにジャを使用する、例33の婦人、例34の女子、例35の主人の会話中にはダの使用も次のように見られる。

- 38 生きな人だよ【クサラシモンヂヤ】(27オ⑧、婦人→婦人)  
 39 奥さんに御成りた<sup>た</sup>とサ【ヲカテヲナイヤツタツチュモサ】(24ウ⑦、女子→友人)  
 40 さそおこつた<sup>だ</sup>らう【ハラカツキヤツチロ】(21ウ③、主人→客)  
 41 まつている所<sup>だ</sup>つた【マツチヨツトコイヂヤツタイ】(23ウ⑦、主人→客)  
 42 大そうおとなしい人<sup>だ</sup>のに【ワサイシンビユナシトヂヤララ】(21オ⑤、主人→客)  
 43 しどいめにあつた<sup>だ</sup>らう【フテメエヤツタロ】(21オ⑩、主人→客)

前代の噺本などでは、ジャが主として文末におかれて、登場人物の位相や待遇関係を示すのに使われやすく、咄の型としてジャ・ダが使分けられるという側面があった(寺田1996)。当資料は会話書でもあるから、登場人物の特徴が端的に示される方が望ましく、それと特徴づける言語的指標のある方が都合がよい。そのようにして見ると、登載される会話主の数が少なく、また一人一人の会話文の量に比例して用例自体も少ないこと、しかもうえに見るような混用例があることから、会話主の特徴を明示するためのジャ使用とは考えにくい。また待遇面から見ても、寺田調査によれば、上位者から下位者に向けてのジャ使用が噺本におけるジャの衰退とともにいっそう明らかになる旨が報告されているが、例36を除きいずれも対等な関係において使われており、上位者→下位者という待遇面との関わりがあるようにも思われない。

次に、46例のダをその上接語(表Ⅰ)および下接語(表Ⅱ)別にして表に示す。形容動詞語幹、あるいは「御出だ」のような敬語表現「御出」などについては、名詞に含めて扱う。

表Ⅰ

上 接 語	
名 詞	23
形式名詞(モノ・コト・トコロ)	5
準体助詞(ノ)	6
副用語	2
形容詞[+ダロウ]	2
助動詞(過去タ)[+ダロウ]	1
助動詞(否定ン)[+ダッタ]	1
助動詞(ヨウダ・ソウダ)	6

表Ⅱ

下 接 語	
ナシ	6
助詞(引用ト)	4
助動詞(過去タ)	9
助動詞(推量ウ)	6
助動詞(ソウダ)	3
助詞(理由カラ)	6
助詞(逆接ノニ)	3
助詞(逆接 ガ)	3
助詞(文末 ヨ)	6

先に見たジャについて、上接語では、名詞5例、形式名詞1例であり、下接語では、ナシ4例、助詞ト(～テ)1例、助詞ガ1例であるから、これに比しても、接続形式が多様である。全体の用例数から言っても、また接続面から見ても、断定辞ではダを主として訳語に据えながら、一部にジャが混入している状況が確認される。

### 3. 2. 2 デアルとの関わり

ダ・ジャの二項は東西対立と見ることができようが、デアルとダ(ジャ)とは、硬軟の文体的対立であると考えられる。デアルは資料内に2例拾える。

- 44 そらうそであ<sup>ら</sup>う【ソラウソヂヤロウ】(19ウ②、主婦《母》→男子)  
 45 いきなり飯ひつをなけつけたもんだから 御はん今少しでこわれて 一はいちらかる所

て有し私か顔なとハ雪がふつたやうだつた【イツキカナヂヨカヲナゲツケツ メシガマ  
チツトデケワレテチラカツテ ヲイガツラナンダユツガフツタコツツアタ】(21オ⑫、客  
→主人)

例44は息子と話す母の会話に出てくるデアロウの例であるが、ほかには

- 46 どし／＼たべるのがいゝのだらうか【ゾンツンウチクトガヨカッタロカイ】(20オ⑥)  
ともあって、ダロウとの混用が見られる。例45についても、ダと混用されている。「て有」を  
いまデアルと読む解釈に従ったが、たとえデアロウという読みが可能であったとしても、  
47 長井源右衛門ほど乱暴な野郎はないだらう【ナゲゲンニヨンガシコスポケナワロワオ  
ンメ】(21オ④、客→主人)

のように、別の場所でダロウの使用も確認される。ダ使用を主軸に据えながら、デアルなど  
の文体的に硬めの表現が時としてなされることが確認される。なお、デアルの丁寧体デゴザ  
リマスやデスについては、後に触れる。

### 3. 3 否定辞

#### 3. 3. 1 ナイとン

ナイとンについては、西日本的であり、他と事情を異にする。全体例で言えば、ナイ13例、  
ン25例あり、ンがナイを凌駕する。これも同一会話主において両形用いられる例がある。

- 48 云事をきかないからけかをしたのだよ【ネジユコモンヂヤツデケガラシタ】(16オ⑫、主  
婦→下男)  
49 御前方よくすミ／＼までそふじをせんから【ワツコガヨクスンクジラマデソヂヲセンデ】  
(14ウ⑧、主婦→下女)  
50 おまへハあれとつき合をせんからしらないのだよ【ワヤアイトツツケヲセンデシイヤラ  
ントヨ】(客→主人、21オ⑥)

例49・50の「ん」は、鹿児島方言「ン」の訳語として用いられている。共通語訳にも用い  
られているンは、うえを含めて18例を数える。一瞥すれば、共通語訳の「ん」は鹿児島方言  
そのものではないかと疑われるが、たとえば次の例、

- 51 彼らかいふ事ハ当に成らん【アイドンガユコテホワネワイ】(28ウ⑫、?)  
を見ると、「ホワネ」のようにナイ(形容詞)からの転訛であるネを含む語句を翻し換えてお  
り、鹿児島方言そのものの現れではない。鹿児島方言にも共通するンに「翻しやすさ」が  
選択に関与しているのではなからうか。

また逆に、鹿児島方言において「ン」とあったものをナイで翻すものもある。たとえば  
52 銭取の道をしりもしないくせに【ゼントイミチユシイヤランヨスデ】(20オ⑧、男子→母)  
のような例であり、これを含めて9例(うち1例は「ズ」→ナイの例)存する。原著者は鹿  
児島方言の「ン」がナイに相当することを把握しながらも、実際に翻す際にはンを選択する  
ことがあったわけである。

#### 3. 3. 2 ヌとン

また資料内には、ヌが4例見られる。

- 53 おもしろくて目が見えぬやうに成つたと見える【ヲモシテモンゴアンデメガミエンゴツ  
ナンシタ】(14オ⑫、主人→客)  
54 芝へ行かねハ成らぬ所があつたから【シベイカンニヤナラントコイガアツタ】(19オ③、  
男子→母)  
55 今年ハ寒いからかい子がそだ、ぬ【コトジヤサンカデケコジヨガソダ、ン】(26オ①?)

56 もう／＼こらへられぬ【スツタイタマラン】(29オ②、男性→男性)

いずれも鹿児島方言「ン」を翻すヌであり、全体的に用例は少ない。使用場面で見ると、とくに例54については、古格のヌを用いることで子から母へという待遇面に配慮したものともとれる。しかし一方で、

57 イ、菓子もらつたら たべきれんけれどもまた明日たべるとて 棚へいれてしまつておいたといふ事です【ヨカクワシモラヤツタヤ クキイヤラドンアシタクチ タネイレヤツタチユモス】(19オ⑩、男子→母)

というように、ンを使わないわけではないので、ことさら例54においてヌでなければならぬ理由はない。他の例についても、ヌ使用に場面性が関わっているとは思われない。新旧ない交ぜの様相を呈したということが、当該資料共通語訳の特徴の一つであろうと思われる。

また、うえに見た否定辞の対立様相は、ナイとンとの対立が基本にあって、ンのなかにヌが組み込まれるという理解が、用例数から言っても妥当であろうと思われる。

### 3. 3. 3 マセンデシタとその周辺

資料中「ませんでした」の類例が散見される。松村明によれば、この言い方は東京語として明治初年ごろ発生・発達し、10年代後半以降一般化したことが明らかにされている(松村1956)。

58 少しも存ませんでしたが【チットモシンハアンヂヤツタ】(13ウ⑦、主婦→客)

59 帰つてはきませんでした【モツツチャキヤンヂヤツタ】(22オ⑤、客→主人)

60 少しもそんじませんでしたか【チットモシイアゲモハン】(24ウ⑨、客→主人)

例51・52に注目すれば、対応する鹿児島方言は～ンジャツタ<sup>(4)</sup>である。逆にこの表現にはどのような共通語訳が施されているであろうか、次に例順に示す。

61 左様とハ少しもぞんぢなんだ【ソゲンコチャチットモシランヂヤツタ】(11ウ⑩、?)

62 目がいたくてたまらんだつた【メガイトシノサンヂヤツタ】(21ウ⑥、客→主人)

63 あたまをうつてあなかあいて困つてはいやしなかつたか【ビンタヲウツボゲチヨヤセンヂヤツタカ】(22ウ⑫、客→主人)

64 けがてもした子供ハ一人もなかつた【ウツボガサレタヤツモラタンジャツタ】(23ウ④、客→主人)

65 怪我ハなかつたか【ケガワセンヂヤツタカ】(25オ⑩、姉→下女)

66 ぼくにハさらにわからん【オラウツランヂヤツタ】(26オ⑤、?)

例61に見られるナンダは、ナカッタ進出以前の江戸語において、普通に行われていた表現である。中村通夫によると、幕末期にはすでに上層部において使用されていたナカッタが、明治以降使用階層が広がって徐々にナンダを駆逐してゆき、20年代にはすっかりその座を奪った趣旨のことが報ぜられている(中村1948)。また、ナンダが主に使用される、明治初年の関西系の会話書が指導的な位置にあって、維新後の東京に氾濫してきたため、江戸語として使用されてきたナンダを包摂した結果、東京のナカッタ対関西のナンダという対立構造が出来上がったという見解も示されている。以上を踏まえて考えると、63と61とが対峙して、ナカッタ対ナンダの新旧対立を見せていることになる。

次に例62を見ると、ンダツタという表現形式が現れている。松村1956は、江戸語の「まし(せ)なんだ」から東京語の「ませんでした」への漸移相として、「ませぬだった」「ませんでした」「ませんだった」「ませんかった」などが明治初年の会話書に現れることを確認し、また、「ませぬだった」「ませんだった」から「ませんでした」という形へ安定してきたという変容の過程を示している。さらに「ませんでした」が通用していた明治20年代の円朝の口

演筆記にも、なおこの「ませんでした」が使われていたことを示し、一部には確かに使用されていたと論じている。また、松村は明治初年の英文法書の対訳例文を検討したなかに、一般的に用いられているナカッタに並んで、動詞に直接するヌダッタの例が拾えることを指摘している（松村1993）。「ぬだった」「(ませ) んだった」などの確例があるところから見て、例62のような表現が実際に世に行われたであろう。さらにンジャッタに最も近い語形であるところから、これが訳語として採択されたのではないかと考えられる。

例64・65は、人物・事物の有無に関する文に書き換えられて訳出され、例66はテンスを捨象した訳に挿げ替えられている。

### 3. 4 一段動詞命令形語尾

一段動詞命令形について、口語尾対零語尾<sup>(5)</sup> という対立が見られる。

- 17 太郎のいたミがなをつたら 庭鳥をつぶして庭鳥汁をこしらへろといふておゝき【タロガイタサガトレタナラ ニワトイヲコロシテニワトイゾセヲセチユエ】(16ウ⑦、主婦→下女) 既出
- 67 玄関に足駄と木刀ガちらかつているからかたづけろ【フンゴンニサシゲタトボクトキレガハネチカケチヤトイヤツメ】(25ウ⑪、?)
- 68 子供のへこおひをとらせ【コドンノヲビユミツシヤイ】(17ウ⑫、主婦→手代)
- 69 かびがはへていますよ 太郎よ ごみだめへすて【コシガニチヨンサ コラ タロワハクダメウツセ】(20オ①、主婦《母》→男子)

例17・68・69は一人物の会話に現れている。17は口語尾をとる命令形となっているが、伝言内部の命令形であり、会話主の直接の談話を映し出したものではない。伝言などの間接的な内容に与る部分に現れる言葉は、得てして中立的な表現がとられがちである。その点で、例68と69とは趣を異にしている。

次の例70は、章段変わっての用例で、同一人物ではないが、ヨ語尾をとる命令形である。

- 70 今もらつた魚をこしらへよ【イマモロタイヲ、こしたエ】(29ウ⑫、主婦→下女)

例70は、ある程度旧態の表現が用いられることで、上位者から下位者へ向けての会話として最もらしさが現れるが、零語尾と対照させれば、日常的な物言いと古格によるあらたまりとの対比的な表現とも理解される。『口語法別記』には、上一段動詞命令形に「奈良県・河内・丹波・宮崎県に「起き」「落ち」とばかり云う所があり」という注記(131頁)があつて、「今わ「ろ」よ」の二つに定めた」としており、零語尾を標準的と見ていないことが知れる。当資料に見られる零語尾は、一部の方言的要素が混入したものと思われる。

### 3. 5 過去推量表現

過去辞「た」と江戸語に新たに発生展開した「だろう」との複合形と、古語「たら・む」からの変化「たろ(う)」との新旧対立が見られる。タダロウの例としては、

- 71 さそおこつただろう【ハラカツキヤツチロ】(21ウ③、主人→客)  
の1例にとどまる。準体助詞ノを介在するものを挙げれば、
- 72 何でも下女の尻ヲマクツタノダロ【ナンデンメロンシユイヘダトヂヤア】(9オ②、?)
- 73 おまいなとハウたれたりおこられたり しどいめにあつたのだろう【ワイナンドコナサレタイキメラレタイ フテメエヤツタロ】(21オ⑩、主人→客)

などの2例を拾える。また、丁寧表現化した例が1例存する。

- 74 御暑御出被成ましたでしょう【アツヲサイヂヤンシツロ】(12オ⑧、主婦→客)

一方、タロウの例はうえよりも数量として多く、

- 75 御つかれ様で被為入ましたろう【オヤツトサーヲサイヂヤンシタロ】(7オ④、?)
- 76 何をしたるかいねい【ナニユシチヨロカイネ】(9オ①、?)
- 77 南大寺まで墓参りニ行つたろ【ナンデシマデハカメイイツキヤツタロ】(11ウ⑥、婦人)
- 78 その巡査が大変真赤に腹立てきましたらるか【ソンジユンシヤガマツケハラケチキヤツタロガ】(21ウ⑨、客→主人)
- 79 ろうやにいりましたろ【ヅヤイ、ヤツツロ】(22オ④、主人→客)
- 80 白い切てまいていたろう【シロカキレデメチヨツタ】(23オ①、主人→客)
- 81 そのとしまハびつくりしましたろ【ソノヨメジヨワタマガツチロガ】(27ウ⑨、?)
- 82 御嬢さまも御成人なさりましたろう【ヲゴイサーモフトヲナイヤンシタナ】(29オ①②?)
- のように、タロ(ウ)4例、マシタロウ4例とある。対応する鹿児島方言を見ると、「タロ・チョコ(チロ)・ツロ」であり、過去辞タの推量形、アスペクト表現の Chol の推量形、古語「つらむ・つらう」の残存形で短呼のツロにそれぞれタロウの訳語が充てられている。『口語法』や『別記』によれば、過去の推量形に関しては、タロウを標準形と定めてある<sup>(6)</sup>。これに照らせば、むしろ当時としては例71など進歩的な現れであったとも言い得よう。また形容詞に対しても、[形容詞終止連体形+ダロウ]と[形容詞未然形+ウ]との対立にも関与する。用例は以下のとおりである。
- 47 長井源右衛門ほど乱暴な野郎はないだらう【ナゲゲンニヨンガシコスボツケナワロウオンメ】(21オ④、客→主人) 既出
- 83 おまへはなせそんなに行義がわるいたろう【ヲマヤナイゴテソゲンシツケガワルカロウ】(24ウ①、姉→妹)
- 46 どし／＼たべるのがいゝのだらうか【ヅンツンウチクトガヨカツタロカイ】(20オ⑥、母→男子) 既出
- 84 草履[ずうり]かよろしかろうか 下太をはいて行うか【ジヨイガヨカロカ ゲタヲフンデイコカ】(25ウ⑧、?)
- 85 亀の甲とすつほんの甲と何レガ固からうか【カメントカメントワドツチガコワカロカイ】(26オ⑦、?)

例46は助詞ノを挿む例であって意味的に等価ではないが、「一からう」と「一いだらう」との対立に副って、ダロウの表現の一類と扱っておく。

#### 4 その他の表現

前章の言語事象は、相当数の用例を持ちつつ異形態との対立を示すものであった。ここでは、会話書の文体的性格を考察するのに着目される用例を記述しておく。

##### 4.1 口頭語的表現

まず音韻現象に関わる表現から用例を見る。

接続母音転訛 「おまい(お前)」(21オ⑩・22ウ④⑫・23オ⑧・25オ⑩・27オ⑪)

ナ・マ行母音脱落「もん(もの／物／者)」

(20オ⑨・21オ⑪・21ウ⑦・23オ⑨・23ウ①②・27ウ①)

「すんました(済みました)」(15ウ⑤)

ヒ・シ音交替 「しどいめ(ひどい目)」(21オ⑩)

ザ・ダ行音交替 「くざさい(〜ください)」(18オ⑨)

j音挿入 「とつくみやい(取っ組み合い)」(21ウ⑫)

「つかみやい(掴み合い)」(22オ①)

いずれも地域的に広汎に見られる音韻現象であるが、ヒ・シ音交替およびザ・ダ行音交替

については、当該地域の特徴的な音韻現象を反映しているとも考えられる<sup>(7)</sup>。j音挿入に関しては、明治38(1905)年国語調査委員会による『音韻調査報告書』第12条を披見してもすぐに知れるごとく、東京府および近郊、京阪・鹿児島いずれもaiおよびauをjai・jauのように発音したようであり、うえの例は口頭語の有様を如実に写しているということであろう。

続いて、語法面上注意される表現を拾う。

86 おまいのやうなよはむしなない【ワツガヨナヤクセンボワネ】(27オ⑪、男性)

87 御夫人方ガさひしかつてゞしよう【メランツンシガトゼンノシヤツドガ】(20ウ⑨、客→主人)

18 死ぬいふても泣もんではないよ【ケシンタチナクモンデヤネテ】(27ウ①、父→男子)

助詞ハの融合あるいはさらに進んで無標示となった例と考えられるのが例86である。「弱虫な[モノ]ハない」と解釈されるが、「弱虫なハ」で準体句、さらに助詞ハの融合を起こしたと考えればいかにも口頭語らしい音韻現象とも関連する事象となる。ここでは、助詞ハが「弱虫な」に融合した結果包摂されたものとみなして、口頭語に多い格の無標示と考えておく。例87は、今日主に西部方言としてその分布の広い「テ敬語法」(岡田1968)の一形式である。この待遇表現形式は、前代上方筋から東日本における一部社会に流入しながらも結局根付かなかったと考えられ(山本1990)、言うなれば最も西日本らしい言語事象であろうと思われる。例18の引用句を承ける助詞トがしばしば表出しないという、いわゆる「ト脱け」なども、地域性の関与する事象と思われる<sup>(8)</sup>。

88 女とけんかしてうらにないたねい【メランツトイサコチネタログ】(27オ⑫、父→男子)

89 もうふしんわしまい【モフシンワスンメ】(22ウ⑦、主人→客)

90 御寿司かきました 召し上つて被下まし【ヲス・ガデケタ ヲアガイヤツタモンセ】(14オ⑤、主婦→客)

例88は、行為の場所を示す助詞ニ／デ選択に関する問題である。動詞には一定の意味を表すのに特定の格を必要とするものがあり、それを格体制と説明するならば、格体制内において助詞ニが選択されることは大いにある。たとえば「親に背く」などはその例である。しかし、うえのような動詞「泣く」などはその体制から外れており、その場合今日では助詞デで言い表すのが一般的である。矢澤真人は、近代文学小説に「こいつの下に働くのか」「切符売下所の前に話している」「送別会に大いに飲んだあと」などのような格体制から外れる所に使われる助詞ニがあり、現代語化するに従ってこれをデ格にその座を空け渡してきたことを説明する(矢澤1998)。それによれば、実に例88は当代的な表現と言えるであろう。

助詞マイの接続に関して、明治39(1906)年『口語法調査報告書』第34条に挙げられている。カ変・サ変動詞にマイが接続する際「くまい・すまい」「こまい・せまい」「きまい・しまい」のいずれを用いるかを問うものであったが、[サ変動詞+マイ]については、東京府一般あるいは神奈川県下一般にはシマイ、近隣地域も、一部の地域たとえば南多摩・北多摩・埼玉県・千葉県ではスマイも用いるものの、主としてシマイであることが確認される。他方近畿圏においては、シマイを挙げる地域は至極限られており、ほとんどがショマイ・セマイ、近郊に間々スマイのあることが報ぜられている。ちなみに鹿児島県下はスンメとある。以上からは、例89はいかにも東京語的なもの言い<sup>(9)</sup>と考えられる。

例90は、丁寧辞マス命令形にマシをとったものであるが、対立する例もある。

91 まあこちらへ御出遊ハしませ【マアコツチュヘヲサイヂヤン】(12オ⑥、主婦→客)

命令形のマセ・マシは『口語法』において両形を立てているが、『別記』ではこう指摘する。

また「御笑談おつしやいまし」など、命令の形で、差止める意味に用いる事がある。「御飯をめしあがりまし」お羽織を召しまし」など、云う人もあるが、「ませ」と云う

がよい。(282頁)

## 4. 2 文語的表現

活用に関して、文語文法に副った用例が見られる。活用語の文語形である。

- 92 あたらしき御さかなを御土産に持てきました【ブエンノサカナヲヲミヤゲモチエ】(29オ⑨、女兒→母)
- 93 はい私の甥でございます 惻々しき奴（ヤツ）です【ハーワアーシガウエヂコザンサザリシガクヂヤライ】(10オ④、?)
- 94 [五十銭]いた、きませバ宜しうござります【五十銭イタ、ツキヤゲモセバヨロシユゴアンス】(18オ⑤、手代→主婦)
- 95 私がいつてミたれハ【ヲイガイタチシタヤ】(22ウ⑩、主人→客)
- 例95は、「～したら」形をとらない。また次は、連体形準体法の使用である。
- 96 おまへいつてすきなをかつておいてよ【ヲマイイクセイスイタトヲケヤイオ】(18ウ⑩、母→男子)
- 97 子供といふハけかをしないもんで【コドンチュワケガラセンモンヂヤ】(23ウ②、客→主人)

例97については対応する鹿児島方言に副う訳出と言えそうであるが、例96は、鹿児島方言の助詞トが準体助詞に相当しながらも、しかと訳出されていない。しかし一方では、

- 98 おひどりで何でもすきなものヲかいにいらつしやるよ【ミンナジブンデスキナモンヲヲケヤツコテ】(19オ②、母→男子)
- 99 甘そふなのをまげてください【アマカロスナトヲナゲヤハンカ】(23オ⑩、客→主人弟)
- ともある。例97は鹿児島方言に「モン」とあるからこそとも考えられるが、例99は96に同じく鹿児島方言の「ト」を準体助詞ノで翻しているのである。

## 4. 3 敬語表現

### 4. 3. 1 デス

断定辞の丁寧形デスが、形容動詞の活用語尾を含めて、67例である。デスの上接語と下接語をまとめて示したのが、表ⅢとⅣである。

表 Ⅲ

上 接 語	
名 詞 [形容動詞語幹を含む]	35
形式名詞 (モノ・コト・トコロ)	9
準体助詞 (ノ)	2
準体助詞 (ノ以外)	2
副用語	4
形容詞	1
助動詞 (過去タ)	1
助動詞 (否定ン)	5
助動詞 (ヨウダ・ソウダ)	5
助動詞 (マス)	1
接続助詞 (テ)	1
接続の助詞 (～トカ)	1

表 Ⅳ

下 接 語	
ナシ	22
助動詞 (過去タ)	15
助動詞 (推量ウ)	6
助詞 (理由カラ)	3
助詞 (疑問カ)	9
助詞 (文末モノ)	1
助詞 (文末ヨ)	6
助詞 (文末ネ)	4
助詞 (文末ナ)	1

上接語に関して、先に表Ⅰで確認したダとの比較において、付く語の種類が多少多いが、ノ以外の準体助詞やマス・テ（テ敬語）・トカに付くものがよけいにあるという点に差があるだけである。形容詞に付くデスの例は、

100 女などハ只もうこわがつてしようかないです【メランツンヤツドマタ ヴヲトロツセシクタマランナイ】(20ウ⑩、主人→客)

である。本来形容詞に直接するデスは、規範的な用法と見なされなかったが、[動詞+マス]に待遇上匹敵する、地域語性の強い[形容詞+デス]が必要とされるようになり、明治20年以降の東京語においてかなり行われていた事情が明らかにされている(浅川1999)。ここではこの1例のみであるが、同時代の東京語においてもさほど違和に感じられない表現であったと考えられる。下接語については、現代語と比較してもそれほど差はないようであるが、

101 昨夜伊藤殿の末息がきました ちいさい人ですな【ヨベイツドンノシイクソチゴガキヤツタガ チンケヒトナ】(9ウ⑦、?)

のように、デスが文末辞ナに続く例は、現代語としては規範的な言い方ではなさそうである。

松村明は、明治初期の洋学会話書に現れるデスの用例を検討し、現代語のデスとの差が、○語形としてデシタラという活用が見あたらないこと

○用法として活用語に付く際の接続の仕方

の点を挙げ、そのほかはほとんど差異のないことを報じている(1990)。当資料においてもほぼ同様のことが言えるかと思われるが、全体としての用例が少ないことや終止連体形終止の例の全体に占める割合が多いことなど、洋学会話書に比べての差はやはりあろう。その一因として、次項に触れるが、丁寧辞使用をデゴザリマスと势力的に分け合っているという点が挙げられよう。

#### 4. 3. 2 デゴザリマス

93 はい私の甥でございます 惻々しき奴(ヤツ)です【ハーワアーシガウエデコザンサザリシガクデヤライ】(10オ④、?) 既出

この例は、デスとの共用例であるが、対応する鹿児島方言を見ると、

デゴザンサー → デゴザイマス

デヤライ → デス

という対応関係をなしていることが分かる。後者は丁寧語が伴われていないところに、デスを用いて、デゴザイマスとの均衡を図ろうとしたものと思われる。ここに出て来たデゴザイマスは、イ音便をとっているものとして資料中珍しい存在である。独立動詞としての用法も含めて、たとえば次のように、ほかはすべて原形デゴザリマス形で出例するからである。

102 奥様 昨夜かい物にハ参られませんでござりました【コジュサー ヨベハケモンニヤイキダシモハンデヤツタカラ】(16ウ⑪、下女→主婦)

例102は、マセンデシタよりもいっそう丁寧度が高く、使用人と雇用者との立場の違いがマセンデゴザリマシタによって明確になるところであろう。

ここも、デゴザリマス全25例を上接語と下接語とに分けて、それぞれ表Ⅴ・表Ⅵとして示しておく。

表 V

上 接 語	
名 詞	19
形式名詞（モノ・コト・ハウ）	4
副用語	1
助動詞（否定ン）〔+ダッタ〕	1

表 VI

下 接 語	
ナシ	11
助動詞（過去タ）	8
助動詞（推量ウ）	1
助詞（逆接ケレド）	1
助詞（疑問カ）	1
助詞（文末ネ）	3

上接語・下接語ともに、デスに比すればその種類はやや乏しさを露呈している。とくに下接語については、テンスに関わる表現を除いて、さらに下へ続くことが少ない。また、文末辞を伴う例がデスに比べて種類も数量も少ない。その最たる理由として考えられるものは、本来具えているデスとデゴザリマスとの待遇度の差にあり、加えてイ音便形をとらないデゴザリマスの表現上の格調<sup>(10)</sup>と相俟ってのことと考えられよう。

ただし『口語法別記』では、デゴザリマスを標準的と見なしていない。

右の「でござります」から「です」まで《山本注：でござあります・でござんす・でござんす等を含めた32語》わ、今でも、地方に因り、身分、仲間に因って、いろ／＼に使分けられて居るが、「でございます」と「です」との外わ用いぬがよい。(297頁)

このことは注意を要する。

#### 4. 3. 3 尊敬表現形式オ～ナサルとオ～ニナル

各種尊敬表現形式が資料中に散見されるが、主たるものとしてオ～ダ(デス)、オ～遊バス、オ～ナサル、～ナサル、オ～ニナル、が挙げられる。このうち、尊敬表現史上当期においてしばしば指摘されるのは、オ～ナサルからオ～ニナルへの漸移相である。オ～ニナル形式の成立・展開については、つとに辻村敏樹(1951)・山田巖(1959)・原口裕(1974)らによって、明らかにされている。すなわち、明治10年代から20年代にかけて主として報道資料に多く見られるようになり、一般的な表現として定着したことが確認されている。明治40年あたりから、オ～ナサルからオ～ニナルへと首座が入れ替わってくるが、たとえば30年刊行の若松賤子『小公子』などでは断然オ～ナサル形式が多いと言う(辻村1951)。これと同時期の当資料の実態としては、

オ～ナサル 8例(13オ⑫、15オ①、19ウ①⑫、24オ⑩、24ウ③、29オ①⑪)

オ～ニナル 3例(13オ⑫、18オ②、24ウ⑤)

であって、依然オ～ナサル優勢である。両者一文中に共用されている例を挙げておく。

103 あのかたが西洋へ学文の稽古に御出被成まして 前月御帰県ニなりましたそふな

【アノツサーセヨイガクモンノケコイヲヂヤンチ アトゲツラクダイヤツタチユモスガ】  
(13オ⑫、客→主婦)

対応する鹿児島方言も、いずれも尊敬語が用いられている。新出のオ～ニナルよりも、古格のオ～ナサルの方が、待遇面においてより相応しかったからではなかろうか。もっとも国定教科書の語法を精査した塩沢和子(1978)によれば、両形とも対話体の文章に採用されており、明治37年使用開始の国定教科書にオ～ナサルの使用はオ～ニナルに引けをとらないことが確認される。そうしたところから、当代の敬讓表現の有りようとしては特異ではなかったように思う。

## 5. 考察

以上対立する言語事象を中心に、口頭語的あるいは文語的な表現を求めて、用例を検討した。これをまとめながら、『鹿児島言葉わらひの種』共通語訳文の文体的な特徴について、再度考えてみたい。

東西対立あるいは新旧混交の見られる言語事象に関して、

- ①アワ行五段動詞連用形について、促音便形をとりながら、「言う」などの一部の動詞が必ずウ音便形をとっている。
- ②形容詞連用形については、動詞の場合と異なり、ごく僅かな例外を除き非音便形をとる。
- ③断定辞は、ジャの使用も認められるが、用法も広がりからいっても基本的にはダ使用である。
- ④否定辞においてはうえと異なり、ンの使用を中心として時折古体のヌも現れ、ナイの方が劣勢である。
- ⑤一段動詞命令形語尾は全体的に用例が少ないながら、ロ形零形ともに使用される。
- ⑥過去推量表現について、当時標準的と見られたタロウ使用に交ってタダロウが存する。
- ⑦丁寧辞非音便形のデゴザリマスはイ音便形デゴザイマスを押して使用される。

のように、旧態表現の勢力は依然ある。このほかにも文語的な言い方も入り込んでいるため、口頭語性に乏しいかと思われる反面、当代急展開を見せたデスの使用は目立っており、音韻現象などに日常語言語的な側面が現れ出ている。なお、共通語成立に深く関わったとされる『口語法別記』での取り扱いについて、①～⑦に分けて要点をまとめて示してみる。

- ①アワ行五段動詞では「言って（た）」「買って（た）」の促音便形を立て、例外的に「請い」「問い」「給い」についてはウ音便形を採る。(64～65頁)
- ②形容詞連用形は案としては両立を立てたが、決議の末非音便形を採る。(169頁)
- ③『口語法』においてダを採り、一方、関西圏を中心に愛知・岐阜・富山以西でたいてい用いられるジャの歴史的展開の説明に留まる。ただし、ヤは採らないと明記する。
- ④否定辞は地域的に見てナイとヌンが勢力が拮抗するところから二つながら通用させる。(250頁) ただし、～ナカッタを採り、～ンカッタは用いぬがよいとする。(249頁)
- ⑤京阪以西はイながら、イが付かない命令形もあるからこれを採らず、ロ・ヨの二つに定める。(131頁)
- ⑥タ（ダ）ロウは全国の口語総て一致する。(261頁)
- ⑦デス・デゴザイマスとし、デゴザリマス等は位相的な偏りがあって採らない。(297頁)

ここに見られた東西対立や新旧混交の言語事象は、『口語法』以前から存した、東京語の揺れに由来するものと見られよう。これ以降国定教科書の果たした役割が大きく、国定教科書の編集指針によって定められた語法が、今日的な共通語として広く波及してゆくことになる。『鹿児島言葉わらひの種』に見られる対立事象は、東京語が全国共通の言葉として整理・編成される過程の一端を具現化したものであった。しかしながら一方で、鹿児島方言を翻すという機能面を考えれば、たとえば共通性のより存する西日本の表現の選択が有効であったという点も見逃せない。たとえばそれが否定辞ンの多用に象徴される。また「テ敬語」「ト脱け」という西日本特有の表現の出例は、訳語がどうしても西日本的表現の傾向にあると理解されよう。

『鹿児島言葉わらひの種』共通語訳文に見られる西日本的表現の多用は、明治後半期東京語の成立から定着へと向かう移行期でもあり<sup>(11)</sup>、全国的に及ぶ時代を迎えつつあったと考えられるが、その勢力が西南日本の隅々に及ぶまでの過渡期にあった、明治期東京語の一断面と見ることができるのではなかろうか。

## 6. おわりに

小稿では、明治30年代に筆写された、真田宝物館所蔵『鹿児島言葉わらひの種』に用いられている共通語について、対立する言語事象を中心に検討した。鹿児島方言の共通語訳として用いられている言葉に、西日本的な表現や文語的な古体表現が使用されていることが明らかになった。これは、編成段階における東京語の揺れが影響しており、東京語が新たに全国共通語たりうるまでの過渡的様相を現しているものと理解されることを述べた。また、諸所に点在する西日本的表現は、鹿児島方言を翻すのに当を得ているという側面もあり、方言を共通語に翻しかえる際に現れた特徴の一つでもあると考えられることを述べた。

今回は一つの資料のもとにうえのように述べたのであるが、より多くの資料においてうえのような状況の確認していくという、基礎的な作業の積み重ねが肝心である。小稿で得た結論は、あくまでも西南日本に行われた明治期東京語の一つの姿として捉えられるものであろう。

## 注

- 1 カナ書きされた鹿児島方言は、夥しい量の補助符号「ー」「、」を交えて示されているが、煩雑になるので、以下省略して例示することとする。
- 2 榎垣実（1962）では、次のように説明する。  
音節について最も特徴的な現象は、一音節語の母音が長音化する（引音節が添加される）ことだろう。……中略……これに対して、他方には正反対の長音の短音化（引音節の脱落がみられる。その実例を類別して示すと、  
a 名詞、ガッコ（学校）・ホオチヨ（庖丁）  
b 動詞、カコ（書こう）・ミヨ（見よう）  
c 音便、ワロタ（笑うた）・ウトタ（歌うた）  
などである。これも長短両形の併用である。……中略……母音の長短意識が極めてあいまいで、長短が意識的にさほど意義を持っていないことから起こったらしく、一見正反対にみえる現象も同じ理由で説明できるように考えられる。（28頁）  
また、鹿児島方言もシラビーム方言として名高い地方であるところから、ウ音便無表記を許容する素地があったことも関係するのではないと思われる。
- 3 飛田良文（1964）は、ヘボン『和英語林集成』のアワ行五段動詞連用形において、ウ音便形が30%近く占めていることを明示し、他資料との比較検討によって、江戸末期から明治初期にかけて、江戸・東京教養層の人々の間でウ音便形が使用されていたことを実証している。
- 4 『現代日本語方言大辞典』1（明治書院）の「鹿児島県方言」（上村孝二執筆）には、  
動詞の打ち消しの過去はンジャッタが特徴であって、イカンジャッタ（行かなかった）式である。注、これを打ち消し形に、断定の過去ジャッタがついたものと誤解しないように。元来イカジャッタ←イカザッタ←イカズアッタなので、ンは余分に挿入されたもの。近時はイカンカッタを用いる人が多くなった。（291頁）とある。
- 5 たとえばサ変動詞の活用語尾を例にとれば、「セヨ→セイ→セー→セ」という変化の道筋をたどっており、今日に関西圏においてとくに行われるセは、活用語尾の融合化してなったものと見られる。零語尾というのは誤解を招く表現ではあるが、東日本系のシロの口に対応する語尾がないという意味で、この表現をいま暫定的に使うことにする。
- 6 『口語法』82・105・135・279頁および『別記』261～268頁等を参照されたい。

- 7 たとえば木部暢子編『鹿児島県のことば』（1997・明治書院）では、ハ行子音に関して、ハ行子音は共通語と比べて特に異なる点はない。「ヒ」と「シ」の混同もないが、語中語尾で「シ・ス」が無声化した場合には、「ヒ」に近く発音されることがある。
- 例：カゴシマ〜カゴヒマ（鹿児島）、ムスメ〜ムシメ〜ムヒメ（娘）（10頁）
- とあるが、共通語においてはヒであるところ、鹿児島方言ではシに対応する例がある。橋口満『鹿児島方言大辞典』の項目を見ると、たとえば「人」などは大隅・諸県地方において、「シト」という語形で使用されている旨の記載がある。また、甌島・屋久島などの離島地域を除く鹿児島方言のほとんどの地域では、ザ・ダ行音の混同はないという（木部1997）が、九州方言ではザ行ダ行を混同する地域がとくに豊前豊後の二豊地域において分布している（風間書房『九州方言の基礎的研究』269頁）。しかしこの現象は、近畿から山陽地方に広く亘って見られるものでもある（杉藤1981）。
- 8 楳垣実（1962）には、次のような記述が見られる。
- トは、「言う」「思う」などの動詞の前では現われないことが多いが、一方ではそれが融合したチュウ・トモウも何チュウコッチャ（何という事だ）・イコトモテタンヤガ（行こうと思っていたのだが）のようにも使う。（55頁）
- 9 たとえば『鹿児島言葉わらひの種』とほぼ同時期の口語文典である『日本口語法』『改訂日本口語法』等は、東京の教育ある中流社会の言語から帰納された語法を示すものとして着目される書であるが、マイについては、「読むまい」「起きまい」「教へまい」「こ（来）まい」「しまい」を標準形として、吉岡郷甫は示している（明治43年『改訂日本口語法』101頁）。また『口語法別記』では、「サ行変格活用の「しまい」を「すまい」又わ「するまい」「せまい」「しょまい」など、とも云つて、全国各地の混用わ、実に甚しく、区別することが出来ぬ、すべて用いぬがよい」（254頁）などと注している。
- 10 ここでは古格をあえて採るという考えに立って述べたのであるが、原形デゴザリマスからイ音便化した当世風のデゴザイマスへの時代的な落差を大きく捉えるならば、デゴザリマス体の『鹿児島言葉わらひの種』の成立を筆写年代から遡って考えることが可能となる。ここに見てきた語法上の特色から言って、全体的にやや前代的な傾向にあることが印象に残るが、本書成立に関する資料を現在のところ内外に持ちあわせていないので、一つの考え方として提示するに留めておく。
- 11 飛田良文（1992）において、話し言葉に与える書き言葉の影響の大きかった国定読本の存在を重視し、国定教科書出現以前の明治初年から明治36年までの期間を東京語の成立期としてしているところによる。小学校の就学率が飛躍的に増大した時期であって、国定読本は国民の読み書きの生活史上大きく貢献した。また、成立期から次の段階である定着期へと移る前後の時期は、口語文典が編纂され、標準語制定へという機運の高まった時期でもある。

## 参考・引用文献

- 浅川哲也「形容詞承接の「です」についてー形容詞述語文丁寧体の変遷ー」  
（『國學院雑誌』100－5・1999）
- 楳垣実『近畿方言の総合的研究』（1962・三省堂）
- 岡田統夫「西部方言における、『先生が、来テジャ（ダ・ヤ）』などの、『テ敬語法』について」  
（『尾道短期大学研究紀要』17・1968）
- 小田切良知「明和期江戸語についてーその上方向的傾向の衰退ー」  
（『国語と国文学』20－8・9・11、1943）

九州方言学会『九州方言の基礎的研究』(1969・風間書房)

小松寿雄『江戸時代の国語 江戸語』(1985・東京堂出版)

塩沢和子「明治期の国定教科書一言文一致体の成立に果たした役割」

(『上智大学国文学論集』11・1978、「明治期国定教科書の口語文」として明治書院・

森岡健二編『近代語の成立 文体編』1991同上書に収載)

塩沢和子「現代口語文典の成立」

(『講座日本語学 三』1981・明治書院、「明治期口語文典の語法」として同上書に収載)

杉藤美代子「ザ行音・ダ行音・ラ行音の混同地域の分布と混同の実態」

(『大阪樟蔭女子大学論集』18・1981、和泉書院『日本語音声の研究三 日本語の音』1996)

辻村敏樹「『お……になる』考」(『国文学研究』4・1951、東京堂出版『敬語の史的研究』1968)

寺田洋枝「江戸語における断定の助動詞「ダ」と「ジャ」ー江戸後期漸本を資料として」

(『國學院雑誌』97-4・1996)

中村通夫「『なんだ』と『なかった』」(川田書房『東京語の性格』1948)

原口裕「『『お……になる』考』続紹」(『国語学』96・1974)

飛田良文『東京語成立史の研究』(1992・東京堂出版)

飛田良文「和英語林集成におけるハ行四段活用動詞の音便形」

(『国語学』56・1964、同上書に収載)

松村明「『ませんでした』考」

(お茶の水女子大学『国文』6・1956、東京堂出版『増補江戸語東京語の研究』1998)

松村明「明治初年の洋学会話書における助動詞「です」とその用法」

(武蔵野書院『近代語研究』8・1990、東京堂出版『近代日本語論考』1999)

松村明「『語学独案内』における打消の助動詞「ない」「ぬ」とその用法」

(武蔵野書院『近代語研究』9・1993、同上書に収載)

矢澤真人「『へ』格と場所『に』格ー明治期の『へ』格の使用頻度を中心に」

(『文藝言語研究 言語篇』34・1998)

山田巖「明治初期の文献にあらわれた尊敬表現「お(ご)……になる」について」

(秀英出版『国立国語研究所論集1 ことばの研究』1959)

山本淳「江戸戯作小説に現れる「テ+指定」待遇表現をめぐって」

(『國學院雑誌』91-11・1990)

山本淳「真田宝物館所蔵『鹿児島言葉わらひの種』と鹿児島方言一音韻表記例の検討を中心に」(『米沢国語国文』36・2008)